

株式会社 矢野特殊自動車におけるQC検定の導入・活用事例

株式会社 矢野特殊自動車
品質保証部 取締役部長
柴田 和典

1. 企業概要

- 企業名：株式会社 矢野特殊自動車
- 代表者名：矢野 彰一
- 創業：1922年11月
会社設立：1953年11月
- 事業概要：冷凍車・タンクローリ・車輛運搬車など特装車の開発・設計・製造・販売



- 従業員数：531名（内訳：本社386名、関西営業所9名、南九州営業所3名、東京営業所4名、中部営業所7名、中四国営業所3名、アルナ矢野特車168名）
- 事業所：本社（福岡）、関西営業所（兵庫）、南九州営業所（鹿児島）、東京営業所（東京）、中部営業所（愛知）、中四国営業所（広島）、愛媛出張所（愛媛）
- 関連会社：（株）アルナ矢野特車（滋賀）、（株）共栄自動車サービス（鹿児島）、大一車体整備（株）（大阪）
- URL：<https://www.yano-body.co.jp>

大正5年（1916年）、当社の創業者である矢野倅一が独自の技術で、日本で4番目の国産車アロー号を造り、大正11年（1922年）矢野特殊自動車（当時、矢野オート工場）は誕生しました。並々ならぬ苦心と工夫と汗で、未知の大海にチャレンジし続けたたくましさや弛まざる努力の結晶で誕生したものです。「創造への挑戦」「必要は発明の母」という創業者のパイオニア精神が当社の原点であり、100周年を迎えた今も変わらぬ誇りになっています。

特装車の受注により、一台一台をその都度しっかり製造する当社は、2003年に

ISO9001 の認証を取得し、「Quality is our mission」を合言葉に、

- ・お客様に喜ばれる製品の提供
- ・品質第一で安全性、及び信頼性の高い製品の提供

に向けて、全社一丸となって品質管理を行うとともに、品質管理力の向上にも努めています。

2. QC検定導入の経緯・目的

2010年、全社各職場（特に製造現場）で問題が多数発生しており、改善を推進していましたが、問題が再発したり有効な問題解決になっていないことが散見されていました。そこで、問題解決のレベルアップを必要としたため、品質保証部が中心となってインターネットで知った品質管理検定（QC検定）を利用することにしましたのが始まりです。導入当初より、部門を限定せず、全社を対象として受検しています。

3. 導入・推進体制と方法

○推進体制：全社に関わることで、品質保証部を中心に推進しています。

○受検者の決定方法

：職能要件に「QC検定○級合格のこと」としており、本人の希望で受検させています。要件に取り入れた理由は、問題解決できる能力のある者が昇格・昇給すべきであるとの考えによります。なお、どの職場にも問題は潜んでいるので、製造部や品質保証部のみならず、総務部門など、全社・全部門を対象にしています。当社における受検級の範囲は2級～4級を原則に、3級の全員取得を目指しています。

○教育方法

：各職場で講師を選定し行っています。また、連続不合格の従業員には、まずは社内テスト（過去のQC検定問題や参考図書を参照して内製）を実施し、合格しないと受検させないしくみにしています。社内テストは品質保証部で実施しています。

○受検料の負担：休日出勤手当や交通費も含め、全額会社負担です。

○導入・推進の工夫

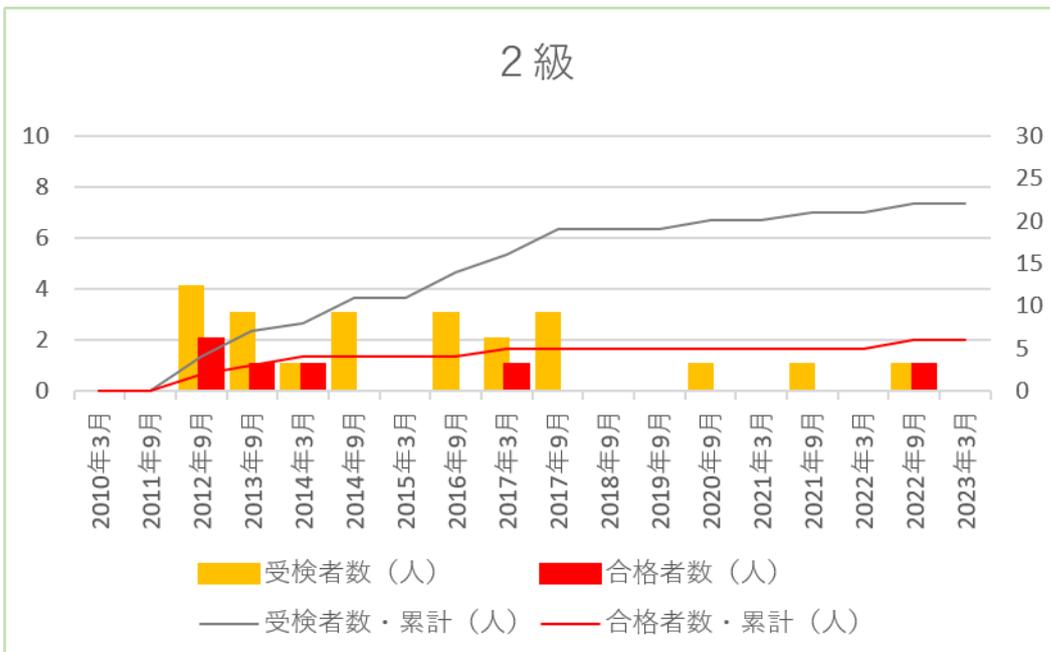
：研修で学んだ知識を実践に生かすことは決してたやすいものではありません。

当社では、常々トップから「QC検定はあくまで手段である。お客様のニーズにこたえる製品を確実に提供するため、QC検定という手段で身に着けたQCの知識を現場・実践に活かすこと」とのメッセージが出され、それが全員に浸透し、組織文化まで落とし込まれています。

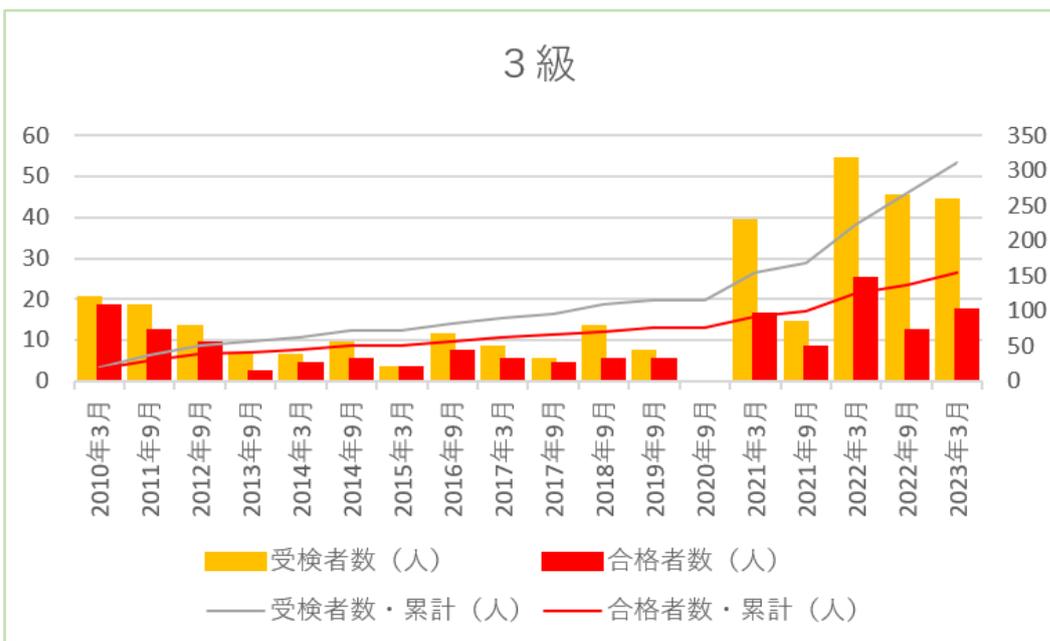
4. 各級の受検者数と合格者数

2010年から現在に至るまでQC検定の累計受検者数は478名、累計合格者数は292名となりました。

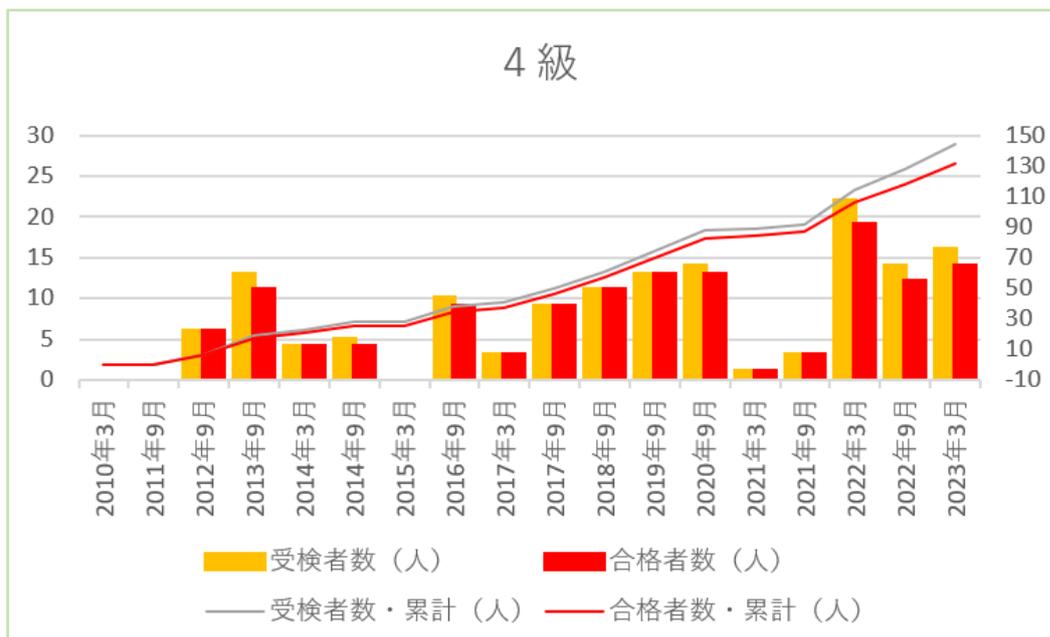
2級では、累計受検者数が22名、累計合格者数が6名となっています。



3級では、累計受検者数が312名、累計合格者数が154名となっています。



4級では、累計受検者数が144名、累計合格者数が132名となっています。



5. 受検の効果

QC検定の導入目的であった問題解決力の向上について、次のとおり一定の効果を得ていると評価しています。

①QCサークル活動レベル向上

当社では、QCサークル活動を重要な活動と位置づけています。チームワークの向上、問題解決、自己実現達成による働きがいの追求のためです。今期でQC発表大会も20年目(20回目)となりましたが、年々発表内容がよくなり、感心させられるほどです。現場の無限の可能性を感じています。

②製品品質向上

年々製品品質が向上し、ブランドを確立できました。QC検定やQCサークル活動も一つの要因だと考えています。クレームも大幅に減少しましたし、SQCDM (Safety、Quality、Cost、Delivery、Morale) と言いますが根元は一緒であり、品質だけでなく安全性や生産性も向上しています。

QC七つ道具やデータ分析など、日常業務で発生する問題の再発防止や未然防止に活用してこそ人の成長や業務改善につながります。ISO9001やISO14001と同様で、「道具として使って・改善」しないと意味がないと感じています。

③人材育成

以上のように、一品受注型の当社では、とりわけ「人が宝」であり、その「人」の育

成手段として、QC検定は役立っていると考えています。なお、当社では、自身の担当した特殊自動車が道路を走行しているのを目の当たりにできるため、より品質管理を自分事としてとらえやすく、QC検定の受検意識を前向きにもてたり、QC知識を現場に活用しやすいという特徴もあるかもしれません。

6. 合格者の声

一部ですが、合格者の声は次のとおりです。

職種	取得級	受検の感想
製造部 (男性一般職)	2級	QCを学び2級を取得できたことにより、日常業務に活かして自信をもって打ち合わせができるようになりました。準1級を目指したいと思っています。
製造部 (男性管理職)	2級	所属メンバーで活動しているQCサークル活動で指導者としてQC手法など教えることができ、QCサークル活動のレベルアップにつながりました。
品質保証部 (男性管理職)	2級	製造部の管理職を集めて毎月開催している会合で、データ分析をわかりやすくまとめ伝えることができるようになったため説得力が生まれ、取り組みが推進できるようになりました。
資材部 (男性一般職)	3級	取引先との交渉において、事実にもとづきデータでの交渉が身につきました。QC検定受検のために学んだおかげです。
製造部 (男性現場管理職)	3級	職場内で問題解決を行うとき、QCストーリーに沿って議論していけば的確な対策を見つけだせるようになり自信がつけました。

7. 学生への期待

当社において、基本的には、入社後にQCを勉強していただき、実践を積んでいくことでよいと考えています。入社前にQCの基礎を学び習得してもらうのはよいことですが、QC知識だけを習得していても即戦力にはなりません。日常業務で使ってこそ、真に生きる知識・能力を習得できるものと考えていますので、日常業務に慣れながら経験を積むことと並行して、現場で活かせるQCを学べばよいと思っています。

一方で、QCは、社会人として必要ということにとどまらず、私生活でも活かせるこ

とだと考えます。そのような観点では、学生時代に学んでおくと、よりよい人生にできるとも考えています。自分の人生を豊かにするために、学生時代に学んでおくのは意味のあることだと思います。

QC検定を受検された学生の方には、部活動やバイト先などで発生した問題に対して、QCの知識を活用してみることを推奨します。実践に活かす体験によって、QCの価値を実感できるでしょう。また、その体験があることによって、就職してからも、研修で学んだ知識を実践に活かすという会社からの期待に応えやすくなるはずです。

8. QC検定への期待

AIなど時代の潮流にあった検定内容を期待します。どの企業も同様だと思いますが、QC検定を通じて、データサイエンティストのようなスペシャリストを養成できればと思います。

なお、ワークライフバランスが求められる時代にあるため、QC検定の試験日時が年2回に固定されずに、もう少し自由度・柔軟性があると、受検者や派遣側にとってはより便利になると考えます。